
真・恋姫無双～男の様な女の様な白いヤツ～

みんとす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫無双〜男の様な女の様な白いヤツ〜

【Nコード】

N7898Y

【作者名】

みんとす

【あらすじ】

自分のストーカーを庇って死んでしまいました。突然ですよね、でも始まりはいつも突然みたいです。目の前のマツチヨで水着？な気持ち悪い人（でも良い人みたいです）によるとどうやら真・恋姫無双の世界に転生させてくれるみたいです。もしか自分が主人公と思っていると主人公さんはきちんといるみたいです。そんな事よりなんだか身の危険を感じてきたのでさくつと行ってしまいましょう！！！

しあいにしと説明書きかな？（前書き）

とりあえず試しにうpしてみます。ミスってないといいな…。

「あいつと説明書きかな？」

どうも初めまして、今回真・恋姫無双の二次創作ものを書いてみようと思迷ってしまいました。

三国志の知識などゼロではありませんが全然詳しくありません。そして、この手のものなど全く書いたことも無かったんですがやってみようと思います。ですので突っ込み所満載なかんじになってしまふと思いますのでその辺はスルーしていただけたら幸いです。

予定では原作の流れをかなり参考にしていくつもりです。あと、ハーレムはあんまり無い方向でそちらは一刀さんに任せようと思いますが誰かとは仲良くしたいと画策中です。

今の時点で一応のエンディングまでの道筋は考えていますがあくまで暫定的なものです。最後の戦いに相応しい攻防にしたいのがなかなか…。ほんの前までは読む専だったので他の同系列の作者様のすごさを感じている今日この頃です。

前書きはこのくらいでどうか寛大な心で私の妄想にお付き合いください。

しあいつと説明書きかな？（後書き）

後書きにはなるべくアニメのＣパート？みたいなのを考えて書いて
いきたいと思います。ではっ！！

これが僕の前世です（前書き）

祝1話うpと言うことでまずは1話目です。こんな感じでいいのかな？短いのかな？誤字とかはないよな？そもそも文法的におかしい事がありそうだし、なんてビクビクしている心境でございます。

これが僕の前世です

目の前にトラックが迫ってきているのが見える結構なスピードだ、そして少し離れた所には最近知り合いになった女の子が驚いた顔をしていた。

「（これは死亡確定だろうな…。まあ、いいかな死んでも…。いいのかな。）」

なんて少しさめた考えをしてたら天地がひっくり返るような衝撃と激痛が襲ってきた。自分がまさかテレビか何かみたいに人を庇ってトラックにひかれてしまうなんて思ってもいなかった。

それでも一人の女の子を助けて死ぬことができ良かったのかな、なんて考えることもできなくなり始めていた。

「（痛い……。い……。いた……。くない……。あれ、ああそろそろ……。ダメなんだなあ……。死んだら、や、っぱ……。り、考えること……。と、も……。でき……。なく、か……。な。）」

ぼやけた視界であの女の子が何か言いながら涙を流しているのを見ながらその少年の命は終わりを迎えていった。はずだったのだが……。

とりあえずは死んでしまった前に戻る。

見た目はいたって普通の少年。両親はいるはずだが会ったことはない、人にはいろいろあるものでわざわざ聞くようなものでもないだろう。そんな彼は学校の大勢は口数の少ない地味な感じ、友達か

らは無口ではないが冷めたヤツだと冗談半分に言われていた。

その評価は間違っではないが大方の原因はその少年は頭で考えていても実際に口にだすことが少ないせいでもあった。あと、若干の妄想癖があったりなかったりといった感じである。

そんな少年に遂に彼女が…と思いきりヤストーカーができました。それがまあなんといいいますか最初はちよつと怖かったけどなんら実害がないので放置していたんですが、なんというかお知り合いになったのだった。

「（今日はいないんだな）ってなにを考えてるんだよ。」

なんて考えながらいつもの様に学校から帰っていると後ろからドサツと音がした。どうしようかきつとでもろくなことにならないだろうなと思いつながら見に行ってみると…。

「……………」

「……………やっぱり。」

あのストーカー少女が倒れていた。予想どりの展開でこのまま放置することもできたのだが流石に相手は女の子なので

「（ほつとく訳にもいかないよね。）えっと、だいじょうぶ?」

「う……………うん……………」

「……………」

目と目が合うその瞬間……………沈黙、そしてだんだん少女の顔が赤く

なつていった。ストーリーカーをするような人がどんな人かは知らないけどなんか普通にかわいい女の子だった。とりあえずずっとこのままでいいわけがないので

「どっか公園とかで休む？」

「……コクッ。」

そして、割と近くに公園があつてベンチに座つて休むことができただがまたの沈黙であつた。少年はしゃべるのが得意ではないのだがなんとかコミュニケーションを取ることに成功してみたところによると、理由は簡単な事でどうやら風邪をひいていたそうだ。そんな状況でストーリーキングするなんて意外と根性があるのかな、なんてずれた感想を思い浮かべていたのだが

「（あんまり変な事を聞いてややこしいことになる前に）それじゃあもう行くから、あんまり無理はしないようにね？」

「え……はい。」

とりあえずはそう言いながら帰ったら何しようかなんてもう既に他の事に気をとられながら座っていたベンチから立ち上がり、帰ろうと踏み出そうとした所で

「……あのっ、気持ち悪い、とか…思わないんですか？」

「えっ？、うーん。……まだ人を好きになつたりした事がないからなんとも言えないかな？それに夜中に電話がかかってきたり、物がなくなつたりそうゆうのはないからね。」

彼女には彼女のストーリーカーの教示でもあるのかな？いや彼女の根がきつと良いんだろう、って何でそんな事考えてるんだか変なこと考えるのはよそうと考えると

「そう……ですか。あの……よかつたら、でいいのでまたお話……してもらってもいいですか？」

俯き恥ずかしそうにしながらそう言ってきた。なんと言うか、普通に萌えてしまった自分がいました。ストーリーカーじゃなくて普通にこうして付き合いたすことのできる人なんじゃないのかなんて勝手に思い、気が付いたらまた話そうということになってしまった。

そんなこんなで彼女と知り合いになったのだが…簡単に申しますとストーリーキングとお話が9：1ですかね。そんな感じの付き合いなっってしまった。そんなことになってから少しの時が経ち、やっとお話が2になってきた時に起こったのが先の事故だった。

初めて一緒に帰り道を並んで歩いて帰って、ここで別れると言いながら信号の前で彼女が恥ずかしさを隠すように走って渡ろうとした所に例のトラックだった。

危ないと思つた瞬間に体が自然に動き彼女の体を突き飛ばした。いきなりの事に驚いていたがトラックが来ていたのに気が付いたのかさつきとは違う感じで驚いていた。

そして冒頭に戻るのであった。

「（そっかあの子の事好きになつてたのかな？それなら死んだのはちよつと惜しいかな。）と云うかなんかアレ以外はほとんど変わった事がもないような人生だったな、次はもう少しいろいろ頑張ってみようかな……。」

「それならもう一度やり直してみる？そこの、い・い・お・と・こつて云うかカワイイ坊やかしらん？」

……その声のがする方を見るとそこに変態がいた。

これが僕の前世です（後書き）

ある所に自分の部屋のベッドの上で泣いてる一人の少女がいたでした。

「うっ……そんな……こんなって、やっとお話できてたのに……私の、私があの人に……本当に……ごめんなさい……」

それから少女は疲れて寝てしまっても寝言で謝っていた。そんな少女の夢の中で……。

この人には人類の進化の謎が詰まっていそうです（前書き）

少し暴走してしまったかもしれないです。おかしいなちゃんとした話だったはずなんですが、前半が少なく後半が膨張してしまいました。タイトルが前半の内容しか指していないのが何よりの証拠ですよね。

この人には人類の進化の謎が詰まっていそうです

そこには筋肉でおっさんでピンクの紐パンでひげでもみ上げが三つ編みの変態さんがいらっしやいました。居たんだよ、居たんだからからしょうがないじゃんよ。

落ち着こうとりあえず落ち着け自分、あれは……どんな生活をしていればあんな人間になるんだろうかそもそも人間なんだろうか？ なんかDNAからおかしい気がするんだけど、とりあえず何か言ったほうがいいだろう。

「（よしっ、何か……）へ、へんた」

「私は都に返り咲く可憐な踊り子、貂蝉よん。」

「……はい。」

動揺して思わず本音を口走りそうになった所で貂蝉さんとやらから物を言わせぬ気というか圧力が発せられたのは思い違いだろう、きつとそうに違いない。

「（それよりも今更なんだけど）あれ？なんでだろう、トラックにひかれて死んだんじゃないか？」

そう思って自分の体を見てみるが怪我をしている所は全く無いし痛い所なんかもなかった。実際に触ってみても実体はきちんとあるみたいだし、それに周りを見てみるとなんにもない本当に真っ白の世界だった。

「そうよ、あなたは死んでしまったのよ。今のあなたはね言うならば魂だけの状態かしら？」

「そうですか。（理解はできるが信じることができないしここはそういう事だと思ったほうがいいのか？）」

「今はちょっと時間がないからすぐに本題に入って悪いけど、あなた転生してみない？」

「転生つてあの転生ですか？」

「そうね、あなたが今考えているのとほとんど同じだと思うわ。」

貂蝉さんが説明したのを要約すると今の記憶と意識を持っていく、容姿や身体能力などの注文もあるていどは聞いてくれるらしい、そして転生後は好きに生きていけばいいらしい。

どうやらその世界は主人公がいるからとか？外史の補正值が足りないから僕を送るらしい？だそうです。

そしてその世界とやらは真・恋姫十無双の世界らしいです。なにやら三国志みたいな世界で男ではなく女が活躍しているみたいでした。て言うのが貂蝉さんが何かしたら頭の中に高速でその知識が流れ込んできて理解できた。なんか頭が痛いです貂蝉さん。

「まあ、詳しいことはあなたは気にしないでいいわ。それでどうするの？」

「転生はします。身体能力は高めにしておきたいんですけど後はお任

せします。」

「あら、ずいぶんと謙虚ね。(うふふ、すぐに返事なんて意外と度胸があるのね気に入ったわ。)」

「はい、身体能力が高いとそう死ぬような事もないと思いますし。あと病気なんかの免疫も高くしてもらえませんか？」

それに欲張るといい事がないだろうし、貂蝉さんが言うにあんまりこのままの状態にいるのは良くないらしい。それと何かいやな予感がしたので早く行きたくなった。

「了解よん。そんな所かしら何かあったらこっちで融通するから細かい事は心配しないでいいわよ。それじゃあ行ってらっしゃい。」

そうして少年は光の中へと消えて行ったのであった。そうここまでは良かったのだが……。

side：天界とかそれ系の所

「さあこれで私の書く項目は終わりかしら、それじゃあ後の設定はよろしくね。」

「はい、後は転生課の方ですのでお任せください。(これなら新人にまかせてもいいな)ネリーこの書類のやってみる」

「課長!!!遂に初仕事デスか?精一杯やらせていただくデス。」

遂に私にも仕事 came ましたヨ。あのやたら偉そうな禿げたオヤジもたまには良い事をするデス。しかもお任せ欄が結構ありますネこれは期待に答えるしかないデス。待っていてください名前も顔も知りませんが泣いて喜ぶようなデキにして見ますヨ転生者さん。

「ほう、あの外史ですとそうデスネ。（ココはこうしてーこんな感じでーフッフ、この能力はーこんなのも面白いデスネーこの際見た目なんかもーいや、伝説のアレなんかもいいデスネ）」

翌朝

「ふう、何とか徹夜してできましたデス。アレ？この警告はなんでしょうか…アレ？…ヤリ過ぎましたデス。これでもギリギリのところで抑えたつもりなのデスが…と、おやこれは…なるほどこの機能で抑えればいいのデスか？」

フッフ、遂にできたのデスこれであの禿げオヤジもワタシの才能と仕事ぶりに感動する事間違えなしデス。それでは提出用の印刷をして提出でしたヨネ。

「できましたデスはg…いえ課長（コレでワタシもどんどん仕事を任せられるようになるはずデス）」

「そうかよくやったな。ふむ…（アレ？なんだか課長の表情がおかしいデス）…お、お、お前！なにやってんだよ！！普通に考えてこのステータスはおかしいだろう！！それにこのく対チート抑制機能はな調子に乗って無茶な事要求してきたヤツへの罰のため

にあるんだぞー!」

「……………。(ヤバイデスどうしましょう)」

「どうした。…………まさか確認する前に確定送信したんじゃないよな、そうだよな?」

「…………いやそれがデスネあ」

「送信したんだな」

「確定送信したデス…………。」

その後、彼女の姿を見た人はだれもいなかったそうです。そして、課長さんがどうにか転生確定する前に緊急措置をしたのでそこまでの大事には一応はならなかったそうです。ですが既に確定送信したデータは改変することが難しく能力と少しの見た目を抑えるにしか至りませんでした。

ついでに言ってしまうと、もし改変ができなかったら…………天
使みたいな何かがある世界に誕生していたそうです。

新生活はいろいろとたいへんでした（前書き）

今までと比べると比較的にもともでギャグも入れることができました。とりあえずこの話のような話を生産して行きたいです。でもたまにふざけてみたり？

新生活はいろいろとたいへんでした

とある森の中

一人の血だらけの女性が木に寄りかかって座っている。着ている鎧は既にボロボロになっていて鎧で守る事のでない所にはいたるところに斬られた傷があった。誰が見てもそう長くは持たないであろう事は明白であり、当人も既に自分の運命はわかっていた。

「もう、そろそろ……。仇は討ってきたわよあなた・子供達…もうすぐ、もうすぐそっちに行くからね。…たぶんあなたは怒るかしらね。こんな事して私まで死んじゃうんだもんね、ごめんなさい…でも、わた…しには…もう…これ、し…か…。」

そうして彼女の意識が途絶えたと思った瞬間のことだった。眩しいと思いい目を開けるとそこは自分と目の前にいる人以外に何も無い真っ白な空間だった。

「あなたは？それにここはいつたい……。」

「あなたにお願いがあるの」

森の中にポツンと佇む一軒家にて

「ちょっと母さん！！ツインテールはやめて、それだけは本当に女にしか見えなくなるからっ！！聞いているの母さん！？」

「ついんてーる？いいじゃないの、どう頑張っても奏ちゃんは女の

子にしか見えないんだから手遅れよっ それに奏ちゃんよりかわいい女の子なんてそうそういないわよ？」

「僕は男だって母さん……。」

この家では実はこんな事は日常茶飯事で二人暮らしただけで十分にぎやかだ。それはそうとどうやら無事に転生できたみたいだ。そして新しい名前は燕水で真名は奏です。一つ目の普通の人の名乗るときに使え、だそうで真名は特に親しい人同士で呼び合うものだそうです。基本的に母さんの教え方はてきとうと言うか大雑把なことがよくあり、正直少し自分の教養に不安があったりする。

次は容姿なんですけど……なんと言いますかどう見ても女にしか見えません。体は小柄だし、肌の色は少し白め、顔は凛々しい女の子のようで、髪は白色で自分で言うのもアレですけどすごいきれいなサラサラロングです。もちろん性別は前世と同じ男で付いてる物もちやんとありました。容姿としては良いか悪いかでは良い方なんですけどやっぱりなんだか納得できません。あのときちゃんと容姿も決めとくんだったな……。

髪なんて短くしてしまえばと思うだろうけど母曰く「もったいないじゃない。」と正直自分でも思っていたりします。でも一番の理由は、毎日母さんが櫛で髪を梳いてくれるのがなんだかむずかゆいけど気持ちいいような魅力に僕が負けてしまったからです。気に入ったんだからしょうがないじゃん。

でも一番の衝撃的事実は目の事です。目の色が綺麗な赤とか紅蓮みtainな感じで夜中だと月の光を吸収して淡く光っているような気がしえます。と実際母さんに言われました。これだけだと良かったんだけど問題はお日様の活動中は目が見えませ……。

詳しく説明すると太陽が昇っている間は曇りでも目を開けると光が眩し過ぎて視界が真っ白になりそのままにしていると目が痛くなってくるし、目を瞑っていても少しきついぐらいです。なのでいつも布を何重かに折りたたんで目隠しをするようにしています。その代わりと言ったらなんだけど夜は日中と同じくらい目が見えます。薄暗いけど遠くまでよく見えるといった感じでなんだか不思議な感じがします。

そんなので生活に支障がないのかというと多少の不便はあるけど問題はありません。耳がいいので大体の物などの位置は音の反射でわかり、人や動物は気配を感じるし勘がいいのかなんとなく足元が危ないとかがわかったりするので大丈夫です。勘と言えば一度森で迷子になったけどなんとなくこつちだろうと思いつながら歩いて行く^と無事に帰る事ができたりと信頼と実績がある勘です。

「できたわ！！さすが奏ちゃんバツチリ似合ってるわよ。」

「もう、今日は髪まとめなくていいから朝ご飯食べるよ。」

「そうね。でも奏ちゃんはご飯食べ終わるまでは頭そのままよ。」

「はいはい、わかったよ。」

目の事があるが基本的には普通の人と生活サイクルは変わらないと思う。昼寝があつて夜は少し遅くまで起きているぐらいでいつもそんな感じだ。ちなみに周りに他の家がないが2刻ほど行けばそれなりに大きな街があつて月に何度か行つたりする。なぜ街に住まな^いかと思つて聞いてみたら「奏ちゃん目立つし、それに私実は指名手配されてるの。」なんて言つていた。前の気遣いは嬉しいけど後

るのは本当なのかな？

「ご馳走様でした。剣の素振りしてくるね。」

「んー、あとでちゃんと見に行くからね。」

剣の稽古を始めたのは二年前の八歳の時からだったが、自給自足の生活では狩りなんかもするので弓と短剣の使い方は八歳の時には結構さまになっていたし基礎体力も十分にあつた。呑み込みが良くすぐに使えるようになってあんまり教える事がなかつたと母さんが落ち込んだりもした。剣の方もこの二年で基礎はもう完璧にできていると母からお言葉を最近いただいたいて、そろそろ実戦訓練をしようと話していたのだが…。

「お待ちせ、奏。」

「ん？……………え？」

そこには結構重そうな斧を軽々と持っているお母様がいました。しかも呼び方がかわつたという事はスパルタモードですね。スパルタモードの母さんは普段と雰囲気全然違いまさに鬼教官へと変貌するのだった。しかもSつけがあつたりする。

「もしかして実戦訓練ですか？」

「そうよ。今日から私と一対一で実戦やるから、訓練だと思つていると大怪我するわよ。」

「いや、その斧をこの剣で受けられるはずが無いと思つんですけど…。」

「受け止められないならどうするかぐらい自分で考えなさい。例えば避けるとかね、何のために体力や足腰を鍛えていると思っているの?」

「はい。よろしくお願いします。」

「ふふ、気合が入ってるじゃない。それに……いつから殺気なんて出せるようになったのかしら?」

二人の間にはまるで戦場のような空気となり、互いの隙を突こうと睨み合っていた所で最初に動いたのは奏の方だった。一直線に突っ込んで来るがその分結構な速さで接近している。どうやら振りの遅い斧が振られる前に一撃当てようと思っっているようだ。

「(やるなら本気でやるし容赦はしないようにと教えてくれたのは母さんですからね。) はっ!!」

「(思いつきりは評価するけど相手の力量もみないとね。) ふっ!」

「(ヤバイ!! いやな予感がするちょっとストップ)っ!!とわっ、と危なかった。」

あと一步の所まで奏が迫ったところであの斧からは想像できない速度で斧のなぎ払いがきた。だが直前でスピードを落とした奏がなんとかかわし距離をとる。

「ちゃんと避けたわね、勘がいいのかしら?」

「当てるつもりだったんですか……。」

と言つと母さんはニッコリと笑つた。……すごい素敵なお母様、そしてものすごく怖いです。ああ、今日生きて帰ることができるかな？それに、これから毎日これが続くんだろうか……。

新生活はいろいろとたいへんでした(後書き)

side: 鬼教官殿

「(ああ、奏ちゃんの一生懸命な顔に驚いた顔…必死な表情なんてたまらないわっ!!なんてかわいいのこの子は!!!)」

「(なんだかすごく嫌な予感がある。ん?隙ありっ!!)」

「おっと、いけないわ。ふふふ…。」

「(母さんの目がヤバイっす…;)」

前世と今の自分（前書き）

前の投稿から少し時間が空いてしまいました。まだ不慣れなのでこれから時間がかかってしまう事もあると思いますが多めに書いていただけると嬉しいです。

前世と今の自分

地獄の実戦訓練が始まってから約二年が経った。もう十二歳になりやつと男らしく成長して……いる事もなくどう見ても女の子なままです。

今では訓練は朝と夜の一日二回するよになり、朝はもちろん目隠しで夜は目隠し無しでやっている。目が見えるとフェイントに引っかけりやすくなり、見えないと相手が気配を消して接近してきたりする。余計に集中力が必要だったりして結構な気力を使うのでどちらにも欠点や利点がある。それをきちんと理解して力や心をコントロールして戦うのに結構苦労した。

それと母さんとの実戦の戦績は朝は勝率三割で夜は六割と夜の方は最近になってやっと母さんより勝ちが多い時が出てきたのが正直嬉しい。やはり夜と言っても自分は普通に見ることができず静かなので相手が隠れても音に気が付くことができかなり有利に戦える。まあ、それでも四割は負けている訳ですが…。

それよりも街から帰ってきた母さんから話したい事があるから来てと言われた。真剣な顔をしていたから何か良くない話か困った事にもなつたんじゃないのかな？

「来たわね。とりあえず座って？」

「うん、それで話つていうのは…」

「そうね…今日街に行ったら最近この辺りの小さい村で賊の被害が結構増えてる噂を聞いたの。それで詳しく話を聞いてみたら、ここ

から少し遠い廃村にその賊が住み着いているみたいなのよ。」

「（賊の討伐：初めて人を殺す事になるのかな）」

「その賊討伐を奏にもやってもらおうと思うの、人を斬ることと集団との戦いの訓練にもなるからね。」

「いつ行くの？」

「明日の朝出発して夕方ぐらいにその廃村に着くようになるとおもうわ。急ぐ必要もないけど時間が経てばそれだけ被害がでるからね。」

「わかった、準備しとくね。」

人を殺すなんて前世から考えるとありえない事だけど、正直今まで前世の事を意識したことはほとんどなかった。自然の中で生活していると狩をしたりするし、この時代は簡単に人が死んだり人を殺したりする事はよくあり力あるものが生きる弱肉強食の時代だ。自分もこの時代の倫理観に心が引つ張られているのかわからないが、いつか人を殺す事があるのはわかっていて覚悟できている。しかし、実際に人を殺した時にどうなるかはわからないので気を引き締めていかないといけない。そんな事を考えながらその日眠りについた。

朝になり朝食と準備を済ませてそれほど多くもない荷物を持って出発した。昼の食事は森の中で何か採ってすませるので荷物には食料はなく口にするものは水しか入ってないので軽いものだ。

「まだ走れる？」

「うん、大丈夫。」

今は森の中を走っているのだが目の見えない生活にも慣れたもので、見えなくても頭の中に自分の周りの地形が大体イメージできるようになって精神的な負荷もほとんどなくなった。小さいころ気を抜くとよく転んだり思いつ切り木にぶつかった事もあった。あれは結構痛かった…。

そして、思っていたより休憩を挟む必要がなかったので当初の予定の夕方より少し早めに廃村の近くまで来る事ができていた。そこで武器などの最終確認などを済ませて様子見や敵の人数の確認をしながら突入しようとしていた。

「じゃあ昼に言ったとおり奏が先に出て行き私は援護にまわるから、実力的に言えば全然問題ないけど油断しない事と躊躇しない事は忘れないでね。」

「わかりました。（やっぱり緊張するな）」

手は震えていないが心臓の鼓動は少し早くなっている。余計な事を考えてしまいそうになる。母さんもいるし落ち着いて行動すれば大丈夫、最初が肝心だ最初に動くことができた後は自然に動けるはずなんて考えている所で

「…奏ちゃんこっち向いて」

母さんがそう言ったと思うといきなり抱きしめられた。いきなりの事でびっくりしたけど母さんの体温と優しさに気がついてそのまま身をゆだねた。そして、そう長くはない時が経ちさっきまでの緊

張や気負いはなくなり落ち着く事ができるとゆっくりと抱擁はとかれた。

「ありがとう、もう大丈夫。」

「さあ行くわよ。」

賊の人数は約16人で家の中にもしかしたらもつと居るかもしれない。まずは目の前にいる見張りの2人を他に気がつかれる事なく速攻で斬る。さあ、今は余計な事は考えることなくやる事をやるだけと自分に言い聞かせて敵へと走り出した。

「てめえら、さつさと殺つてしまえ。」

「クソツ、この野郎が!!」

「よつと、てやあ!!」

親玉らしきヤツの言葉で斬りかかってきた手下の攻撃をかわして喉を狙い剣を突き出し引き抜いた。敵は喉から血を噴き出しながら倒れ地面を赤く染めた。なるべく鎧のついていない相手の急所を狙えと母さんとの実戦で言われて訓練していた成果がでて狙いは正確だ。これで相手は親玉をいれてあと3人となった。

「チツ、役立たずが」

「親分もつだめですよ俺達...。」

「うるせえな、これだけやられたうえに逃げるってのか? いいから

「一斉にいくぞお前ら」

「奏、あなたは奥の親玉を」

そう言った母さんの方をチラツと見て頷いた。母さんが先に走り出し斧をなぎ払う事で敵の一人を真つ二つにし、それに気を取られている間に親玉の前へと到着することができた。

「ガキがなめるなよ。このっ！！」

そう言いながら斬りかかってきた親玉の剣を自分の剣で受け止める。母さんの斧と戦ってきた自分にとってこの程度の威力の攻撃は軽い。

「なにっ！！このバケモノが」

「（まあ、普通じゃないよねっ）」

わざと一瞬力を弱めて相手の隙を作つて剣を押し返した。相手は押し返された反動で仰け反り隙だらけであるが腕が邪魔な頭部を狙うよりも安全に他の所を狙つて剣を振るう。

「はっ！！（このまま腕をもらつようっ）ふっ！！」

「奏ちゃんをバケモノなんてふざけた事言ってるのはどいつかしらっ！！」

「ぐはぁ！！」

狙いど通りに腕を切り落とせたがいつの間にか相手の後ろにまわ

ついていた母さんによって切り倒された。いつの間にもう一人を倒してそこまで移動したんですか…。

「（まだ気を抜いたらいけないか）」

「大丈夫よ、もう誰も居ないわ。」

「そうですか…ふう。（結構疲れたかも）」

周りを見ると死屍累々とは言いすぎだがそこら辺に色々な死体が転がっている。流石にこれは気持ち悪くなるかも…でろつとでてたりしてアレですね。

「お疲れ様、さあ帰りましょ。」

「了解。このままにして帰ってもいいの？」

「私達だけで全部埋めるのは大変だし野犬とかが後始末してくれるから大丈夫よ。ああそれと夕食分の食料を少し拝借してから行くからしら。」

そうして初めての賊は終わり疲れた体で家へと走り出した。途中で夕食を食べ汚れた服や体を拭くために休憩を取り、やっとこさ家に着いた時には深夜になっていた。

「さあ、疲れているだろうからさっさと寝るのよ？あつ髪だけはいとかなないとね。」

「うん。ふぁー…。（本当に眠い）」

その後、途中何度も寝そうになりながら髪をといてもらっていた時はギリギリ意識があった。終わったような気がして夢か現実か怪しい記憶の中ふらふらとおぼつかない足取りでベットまで行き眠りについた。

一人の血まみれの少年が何かに囲まれていた。ほとんどは返り血のようだが少年の腕や足に浅く斬られた様な傷があり、少年は酷く動揺していて手も震えていた様だった。

「何なんだこいつらは倒しても倒しても起き上がってくる。」

「よくも殺してくれたな。」

「痛い……腕が俺の腕がない。」

「お前も同じ目にあわせてやる。」

「俺達だって生きていてかったんだ。」

薄暗い空間の中でそんな事を言いながら不気味な黒い人型の影が押し寄せてくる。

「どうなっているんだよ、この人たちはやっぱり……。」

「大丈夫……。」

「えっ、誰……?」

目の前の者達の声とは違うどこかで聞いた事のある声だと思っていると、上から小さな光が自分の元へとゆっくりと降りてきた。その光に触れてみると少し光が増し心地の良い暖かさが全身を包んだ。

そして気がつくと周りは薄暗い空間ではなく暖かな陽射しが降り注ぐどこまでも続く広大な草原へと変わっていた。

「あれ？目が見える…（僕の目はたしか）……。」

前世と今の自分（後書き）

夢の中で見た事のない格好をした少年が苦しそうな表情で何かにおびえている様だった。そして私は気が付くとその少年に声をかけていた。

「今の夢は……。あの男の子…なんとなく奏ちゃんに似ていたような」

そう思って少し離れた所で寝ている奏を見ると、どこか安らいだ表情で寝ていた。

世界にはいくつもの物語が（前書き）

やっとこさ投稿できました。少しでも感動的にできていたらいいなあー、なんて思っています。そんなこんなでして、これではしばらくは気軽に読めるもを書いていく事になると思います。投稿スピードが少しは上がるかも？

世界にはいくつもの物語が

最初の賊討伐から約一年ぐらいが経ち十三歳となり、その間に時々付近に出没する賊を討伐しに行く事も何度かあった。それに加え母さんとの戦闘訓練もあり着々と実力が付いていった。

そして今日は母さんと街まで降りてきていて、とりあえず買い物しながら周辺地域の最近の情報を収集していた。していたはずなんです…。

「奏ちゃんあんな所に服を売ってる店があるわよ。一緒に行きましょ、いえ行くべきよ。」

「いや、いいよ。(絶対に女物の服を着せられるに決まっているし)」

実際に着せられた事があつたりするのは絶対に誰にも言えない。服というと今の僕の格好はアオザイみたいな服の上に外套を着ている。目立たない様にと毎回着ていくが逆の意味で目立ちますよ。

「もう、相変わらず冷たいんだからちょっとぐらい付き合ってくれてもいいのに悲しいわ。それにあの服とか絶対に似合うと思うんだけどな。」

「明らかに女物だよね!!あれを”息子”に着せようとしてたんですか。いいから用があるんなら見てくれれば?」

「そっ?ならちよつと行って来るからその辺で時間つぶしててね。」

「わかったよ。（本当に服屋に用があつたんだね）」

そう言われたが目が見えないので店屋を見てまわる事はできない、なので色々な人々の会話を盗み聞きしながら適当に歩いていた。

それにしても何だか今日は街が少し騒がしいような気がする。あとすごくいやな予感がすると自分の勘が言っているような気がしてならない。

「久しぶりね。今は燕水ちゃんだったわよね？」

声が出た、すごく聞き覚えがある声が目の前からしています。僕の脳内であるのむさくるしい姿が再現されていて多分本物と比べても大差ない物だろう。それほどに強烈な印象の人物がなぜか今、自分の前にいる。

「あらどうしたの、もしかしてこの美しい姿に見とれちゃった？」

「いえ、見えませんし。（みたくもないしね）」

「そう、それは残念ね。それはそうと実は話があつてきたのよ、あなた…いえ、あなた達にね。」

「いきなりですね。それにあなた達って…。」

「詳しい話は二人揃ってからにしましょう。」

それから貂蝉さんの後について行く事にしたのはいいけど、何だかとても多くの視線を集めているのはきつと気のせいでありたい。

ようやく目的地に着いたみたいだったが、そこにはちょうど服屋で
買い物を終えた母さんがいた。

「あら、奏ちようどよかったわね。それと後ろのあなたは…。」

「あれ？この人と知り合いなの母さん？」

「まあね…多分用件もわかるわ。落ち着いて話したいし、家に帰っ
てゆっくり話しましょう。それでいいかしら貂蝉さん？」

「分かったわよん。あと話するのはあなたに任せるわ。」

「ありがとう…。行くわよ、奏。」

「あっ、うん。」

よく分からない内に母さんと貂蝉さんの話はまとまり、微妙な雰
囲気のまま家路へと急ぐ事になった。その後あの巨体が後ろから付
いてくるのが何だかアレに追いかけられているような気がしてなら
なく落ちつかないし、僕と母さんがかなりのスピードで走っている
のに普通に付いて来るのがちょっと怖かった。

家へと到着すると話をする訳だが母さんが少し時間がほしいとの
事で先に僕と貂蝉さんの話を済ませる事になり母さんは外へと出て
行った。だが今は話より母さんの様子が気になってしょうがないの
だが話は多分転生の事とかならうから聞かないわけにもいかない。

「話って言うのはなんですか？」

「そうね、まずは色々と普通じゃない感じの転生になってごめんなさいね。それについてはこっちの責任なんだけど一度決まったからには変えることはできないの。」

「そうなんですか…。（今となつては別に気にはしてないけど）」

「あと予想外の事だったから何か…異常な事態が起きないとは言いきれないの。」

「それは怖いですね…。でもなつてしまった物はしょうがないので何も起きない事を願いますよ。」

「そう言つてくれると助かるわ。」

それからしばらく色々と聞いてみたかった事なんかの話をして時間がある程度経った。そこへ母さんが帰ってきたので次の話をする事になる。

「まずはあとどのくらいの時間があるのかしら貂蝉さん?」

「明日の昼ぐらいまでは大丈夫よ。」

「そう…。単刀直入に言つちゃうと明日私は消えちゃうの」

「えっ……それって死ぬって…?」

「うーん、ちょっと違つかしら、とりあえず奏ちゃんと初めて会ったのはね……」

いきなりすぎる衝撃の一言を脳が処理できていないが話は始まっ

た。出会いの始まりからこれから終わろうとしている物語について、ゆっくりと…。

母さんは昔それなりに有名な武者者だったらしい、だが誰かに仕えるような事は無く村で夫と子供達でゆっくりと暮らしていたらしい。当然その村は賊なんか来ても母さんが追い払い段々と村は大きくなっていった。

そんなある時にどこぞのお偉いさんが母さんに目をつけたらしく使者がきた。結構な報酬を約束してくれていたがそんな物には興味が無かった母さんは前来た同じような話と同様に断った。

しかし、そのお偉いさんは断られた事に相当腹を立てたらしく、賊と偽って自分の部下達に母さんがいない間に村を襲わせた。部下達は村を襲えば後は好きにしていいたいと言われていたらしく、襲われた村の状態は本当に酷いものだったらしい。

母さんが帰ってきた時にはもう既に村は蹂躪され尽くされた後で生き残っている者などほとんどいなかった。当然母さんの家族は皆殺されていて家は焼け落ちていた。

それを見た母さんは家族の埋葬を終えると直に犯人の元へ向かった。日が落ちて夜が来るまで建物の近くでひっそりと息を潜め時がくるまでまつた。

真夜中になり母さんは動き出した。とりあえず目に付く兵士から殺していったが数の力には勝てるわけも無く、ついに疲労で体がふらついた所を狙われて致命傷をおった。どうしても親玉だけは殺さないで死んでも死に切れないと最後の力で親玉を見つけて殺してや

った。

後はどうなってもよかったが最後は家族の元で死のうと思いなんとか脱出をしたまではよかったが、もう長距離を移動する力も無く森の中で最後を迎えようとしていた。

そんな時にいきなり目の前に貂蟬が現れて奏を育てて欲しいと頼まれた。奏が一人で生きていける用になるまでの間は命を繋いでくれると言ったが、もう生きる事に執着していなかったなのでこのまま死んでしまおうと考えた。

しかし、奏を見た時に死んだ家族の事を思い出してなんだか育ててみると言われている気がして結局引き受ける事にした。そして独り立ちができる判断され、遂に今日その時がきたと言う事である。

少し長い話が終わり未だ頭の中は混乱しているが今説明された話の内容は理解できた。つまり明日の昼には母さんがこの世界からいなくなってしまうという事で、明日からは一人で生きていかなければいけない。

「今まで話さなくてごめんね。話さないとは思っていたけどやっぱり話せなくて、それでこんな急な事になっちゃって…」

「いいよ、そんな事簡単には言えないだろうし…。それじゃあ僕も母さんに色々と話さないといけない事があるね。」

「そうなの？でも今はもう夕食にしましょう。」

「そうだね。そう言えばお腹がすいてきたかも。」

とりあえずその場の空気を少し軽くできた所で、いつの間にか空気を呼んで部屋の外へと行っていた貂蝉さんが部屋へ入ってきた。

「じゃあ、私は明日の昼にまたここに来るわ。」

そう言ってさっさと出て行ったが気を使ってくれたのだろう。それからは特に変わりはなくいつもの様に夕食になったが話はいつもと違って僕が転生者だと言う事と前世の事を母さんに話した。

母さんは前世の世界の事に興味を持って色々と質問をしてきた。他愛の無い事から学校や日常生活についてたくさん話をした。まるで明日には母さんがいなくなるのが嘘であったと錯覚しそうになったが、今は余計な事は考えないと自分に言い聞かせてその時間を楽しんだ。

話は夜遅くまで続いたがもう寝ようとなり、少し恥ずかしかったと一緒に寝ることになった。今日は眠れないかと思っていたが、母さんの暖かい体温を感じていると安心できて自然と眠くなりいつの間にか寝ていた。

翌朝起きると母さんはもう起きていていつものように朝食をとった。その後は昨日の話の続きを少ししたが訓練の時間となり最後の訓練へと向かった。

最後の訓練だから気合を入れて訓練へと望んだが結果は4勝6敗となってしまう。最初の頃と比べるとだいぶ内容の濃い試合になったが母さんにはまだまだ及ばなかった。男として少し悔しかったが同時に最後まで越えられなかった壁として自分の相手をしてくれ

た母さんを誇らしく思えた。

それからは昨日話をしたのだが母さんとの別れと同時に旅にでて修行し見聞を広めてこれからの生き方を決めようと言う事が決まった。なので旅の準備をしながら最後の時間を過ごしていた。

「とりあえずこんなものかしら、あとお金はあんまり無いから食べ物には森で何か取ったりしてできるだけ節約しないとだめよ。」

「うん。本当にもうすぐなんだね……。」

「そう…ね。……私はね、奏ちゃんに会えて本当に良かったと思っているの。もしあの後死んでしまう事を選んでたらきつとあの人や子供達に怒られてたと思うの。奏ちゃんのおかげで本当に心から笑って会いに行けるし、子供たちにも新しい弟の話をいっぱい話してあげないとね。ありがとうね、奏ちゃん。」

「そんな事…、僕の方がお礼を良いたいよ。母さんが僕を育ててくれて、二人だけだったけど毎日賑やかで楽しかったよ。訓練の時はきちんと厳しくあたってくれたけど落ち込んだ時には優しくしてくれて……。……もう…いなくなっちゃう…なんて……。」

そう言つと母さんはゆっくりと抱きしめてくれた。よく知っている心の奥まで届いてくる温かさで、これからもう感じることでなくなる感覚だ。

「そろそろ時間よ……。」

貂蝉さんがいつの間にかいて、終わりを告げた。

「このままでいいわ。」

「そう、わかったわ。」

本当は別れるなんていやだと言いたい…。けどそんな事を言っても仕方が無いしどうにもならないのはわかってる。

母さんの体が薄く光ってきて本当に消えていくのを感じる。ほとんど見えないのがわかっていても目隠しを外して最後の母さんの顔を見ようとす。

「母さん…ありがとう、…本当に、育ててくれて…今まで…ありがとう。」

「ほら、そんなに泣かないの。いつでもちゃんと見てるから、これからは奏ちゃんの思うように生きていけばいいわ。…それじゃあね。」

光が無くなったと同時に温もりも一緒に消えてしまった。消えてしまったが母さんが今までくれた、たくさんのかげがえの無い物はしっかりと心の中に存在している。

「母さん…。」

泣くまいと思ったがどうしても目から涙ができて止まらない。奏はそのままた暮れまで静かに泣き続けたがやがて疲れて眠ってしまった。

いつもとは違う静かな家の中でまた気持ちに戻りかけたがそんな事ではいけないと自分に言い聞かせて気持ちを切り替える。

朝食を食べ終わって遂に13年暮らしたこの家ともお別れだと思いい見回していると、壁に母さんの斧…とは少しだけ違い一回り小さくなった替わりに2本の斧が立てかかっていた。

「これは…大事にするよ母さん。」

意外と少なく軽い荷物と自分にはまだ重い新しい武器を背負って家を出た。

「行ってくるよ母さん…。」

こうして一人の終わるはずだった女の物語がようやく終わりを迎えて、その女が育んだ種が新しい一つの物語を紡ぐために旅だつて行った。

世界にはいくつもの物語が（後書き）

「行ったわね…。そういえば何で私はあんなに強くなってたの？」

「あの子を育てるためにちょっといじらせてもらったのよん。ある程度力がないとこの時代は生きていけないのよね。」

「ある程度…ね。なかなか面白そうな人生になりそうね、奏ちゃん？それじゃあ久しぶりにあの人と子供たちに会いにいきましょうか。」

旅先での出会い（前書き）

とりあえずフラグを建てる、回収できるか何て考えません。いきなりですね、すいません。

ただ今、三国志演戯を勉強中として投稿が遅れました…と言っ言いい訳を試してみたり。それで思った事は、呂布と貂蝉って夫婦だったんですね。いや、妾だっけ？それを恋姫で考えると…。
うん！それではお楽しみください。

旅先での出会い

荷馬車に揺られながら旅に出てからもう数ヶ月が経ったんだなと
考えていた。実際に旅に出てみて分かった事は色々である。

街に行く時に外套を着ていたのは正解だったらしく、ずっと外套
を着ていると流石に暑くなるわけで脱いで街の中を歩いていると厳
つにお兄さんとかによく絡まれた。どうやら目の見えない少女を誘
拐して売り飛ばすとか色々しようと考えていたみたいだった。

だが僕がそこいらに居る様な一般人に負ける事はなくて返り討ち
にしていったのはいいのだが、そんな事が街に行く度に高確率で起
こるのでは流石に嫌になってくる。なので街では必ず外套を着るよ
うにしている。

その他にもいろんな事が有りながらも街を転々としていて、今は
荊州の北にある南陽辺りだったと思う。母さんから地理についても教
えてもらったがこの時代に地図はたいへん高価なので大体のイメー
ジしか分からなかった。そして実際に歩いてみると、分かってはい
たが中国の大地はとても広いです。

なので徒歩での移動では限界があり、長距離を移動する時は今の
ように商人の荷馬車に護衛として乗せてもらって移動している。

そしていつの間にか街の目の前まで来ていた。荷馬車が街の中へ
と入っていくが話には聞いていた通りでかなり大きな街みたいだ。
大きな道には多くの人が行き交っていて、店や屋台も結構な数ある
みたいだ。

街の様子に気を取られていると目的地に着いたみたいなので荷馬車から降りた。

「いやー本当に助かったよ嬢ちゃん、盗賊に襲われた時はどうなるかと思っただけど嬢ちゃんが居て良かった！！」

「いえ、自分の仕事をしただけです。それにこんなにお金を貰ってもいいんですか？」

「ついさっき貰った報酬のお金は最初の約束額の二倍ぐらいはあったと思う。」

「いって事よ、盗賊に襲われたのに荷物は無事だし馬車には傷ひとつ無いしな。他の商人の奴らに嬢ちゃんの事言っというてやるよ。おっと、俺は仕事があるからそれじゃあな」

「はい、ありがとうございます。……僕は男なんだけどなあ」

この旅で同じ様な事は既に数えるのが嫌になるほど聞いてきたが思わず呟いてしまった。そんな考えをさっさと頭の隅に追いやって自分がするべき事を考える。

「まずは情報収集か。お金はさっき貰ったので十分にあるし、そろそろ馬に乗れるようになった方がいいのかな？」

いろいろと考えていたがお腹が空いてきたので、ひとまず昼食を食べるために大きな通りを歩いて行こうとした時だった。考え事に集中し過ぎていたのか脇道から走ってくる人に気がつけなかった。

「うわぁー！ー！ー」

「ああ？つつ痛てえなクソ餓鬼が」

「待ちなさい！！」

「もう来やがったか…こつちこいや餓鬼！！」

何がなんだか分からない内に走ってきた男に捕まって刃物を向けられてた。男の意識が完全に前に居る女の人に向けられていたので投げ飛ばそうかと思っただが、前に居る女の人が気配や身のこなしで相当強そうな人だったので様子を見る事にした。

「見て分かるだろさっさと道を開けな、早くしないとこの餓鬼がどうなるか分からないぜ」

「人質を離しなさい」

「離せと言われて、はい、そうですねーって聞けるかよ！」

「（そりゃそうですねー。ん？）」

なんだか前に居る女の人と目と言うか視線が合ったような気がした。気のせいかと思ってもう一度チラッと見てみると僕を見ているみたいだった。

「…お前達はこの状況で人質を取って、どうするつもりだ？」

「びっ、びっして」

「（これはまさか……、隙をみて自分で何とかしろと？）」

「まさか人殺しをしたい訳じゃないでしょう」

「（たぶんそうだよね…でもどうしよう。とっ、とりあえずっ！！）」

「うっ……そっ、そんな口をきいていいのかよ？こっちには人質がいるんだっ。いつでもこうして剣を動かさ「てりゃ！」っくはあ」

剣を首に当てようとした手をもって地面に向かって思いっきり投げつけた。男は背中を強く打ち付けてうめいていたがあの女の人我倒れている男にとどめを刺した。

「運が悪かったようね、ご愁傷様。怪我はない？って大丈夫よね」

「あっ、はい。大丈夫です」

「そう、よかったわ。後はお願いね」

「はっ！」

女の方はそう言って警備の兵士に命令していた。強そうだったがそれだけではなく偉い人？きつと将か何かだろうと予想をつけた。

「あー、運動したら何だかお腹が空いてきちゃった。そう言えばもうお昼になるわね…あっ、そうだあなたも一緒にどう？」

「えっ、僕ですか！？」

「そっよ、巻き込んだじゃったお詫びだからお金の事なら心配しなくてもいいわよ。…それに帰っても冥琳に執務室へ連行されるだけだ

るっし」

「いえ、いいですよそんな…（まさかそっちが本音？）」

「遠慮なんてしないでいいから、ほら行くわよ！」

「えっ、あ、ちょっと…！」

そう言っつて抵抗する間も無く無理やり手を取られて連れて行かれた。どうやら行きつけの店がすぐ近くにあるらしく、足取りに迷いが無く少し歩けば着いた。

「じいよ。」

「はい、いらっしやいませー、あら雪蓮ちゃんじゃないの」

「こんにちは、おばさん。二人なんだけど空いてるかしら？」

「はいはい、奥が空いてるよ。見たことの無い子を連れてるわね」

「この子？この子はねー、友達？かしら」

「どづもこんにちは（適当ですねこの人）」

すごいアバウトな説明をされておばさんも苦笑いをしている…様な気がする。見えないしね、そんなことより店の中は食べ物の良い匂いが充満していて本格的にお腹が空いてきた。

「ここで話してたら邪魔になるわね。さっさと席につきましょ」

「そうですね（とりあえずタダ飯が食べられるんだし、細かい事は気にしないでいいよね）」

席に着いたのはいいけど実は目が見えないからメニューが分からない。いつもは匂いからメニューにあるであろう料理を頼んでいたけど、どうしようか無難な所を攻めていくしかないかな。旅にでてから今まで一人でしか食事をしていなかったので、いままで気にしていなかった事が問題となっていた。

「そう言えば、自己紹介がまだだったわね。私は孫策よ」

「燕水です…。（ソンスクって…孫策ですよ。本当に女の人だね、知ってはいたけど何か違和感があるな。今まであまり深く考えなかったけど三国志か…、黄巾の乱はまだ起きてないみたいだしその前って何か大きな出来事とかあったかな？あんまり三国志は詳しくないからな）」

「…ねえ、それ脱がないの？」

「えっ！はい、脱ぎますよ？（そうだよ。普通は脱ぐよね。その前に顔も見せないで自己紹介とか失礼だし、孫策さんて偉い人だよ。ね大丈夫なのか僕…）」

今更ながら人通りの多い所や店の中でまで顔を隠す必要があったのは単に知り合いが居ないからで、長期間街に滞在してみる事もいい経験になる。もうちょっと人と関わっていかないといけないなと思いつつながら外套を脱いだ。

「あら、中身はこんな綺麗な子とはね…。髪がすごく綺麗、祭よ

り白に近い色ね」

「いえ、そんな…（やっぱり女だと勘違いしてるよね）」

「それと…目が見えないのかしら？」

「はい…、でも生まれつきなのでもう慣れました。」

「そうなの、でもメニューは読めないわよね…」

「はい…じゃあ、注文はお任せします」

「むむ…それは責任重大だね…。…決めたわっ！おばちゃん、炒飯と餃子二人前とチンジャオロース、あといつものお酒をお願いね」

「はいよー」

注文が済んでからは料理が来るまでお互いの事を話していた。僕は旅で立ち寄った街の事や商人から聞いた話などをして、孫策さんは最初この街の話だったが途中で日ごろの愚痴に変わっていた。話の中で冥琳と言う名前がよく出てきて悪口などを言っていたが、何だかんだで信頼している事が話の節々からわかる。

「はい、お待ちどうさま。炒飯と餃子二人前とチンジャオロースにいつものね」

「ありがとうございます、おばちゃん。さて、冷めない内に食べましょ」

料理からは食べる前から美味しいと分かるぐらいのいい匂いがしてくる。最近では自分で食材を採ってきて調理していたからちゃんと

料理された物を食べるのは久しぶりだ。

「どう、美味しい？」

「はい！！すごく美味しいです」

出てきた料理はどれも美味しく、どこか懐かしい家庭的な味だった。

「それにしても見えないのによくあんな動きができるわね」

「慣れというか…、音や気配に敏感なので」

「それに、力も結構あるみたいだしね」

そう言って立てかけてある二本の少し小さい斧を見た。

「いえ、そんな事は…（そう言えばこの斧の名前って無いな、別に無くてもいいけど考えてはみるかな）」

「むむむ…、なんだかここに居るのは良くない気がするわね」

「どうしたんですか？」

「んー、ちょっと用事ができたからもう行くわね。あっ、お金は払ったから」

「ああ、はい。ありがとうございます」

「それじゃあまた会いましょ」

そう言って孫策さんは言ってしまった。

「またって…、確かに会いそうな気は僕もするけど」

それから食事を済ませた後に街をまわり、日が沈みかけた頃には宿へ帰った。

ちなみに食べ終わって店を出る時に「ここにも居ないか、どこに行っただんだ雪蓮は…」と言う声が聞こえたがきつと気のせいだね。

「んー、盗賊か…。討伐隊がすぐに出るから大丈夫だって言ってたけど、見に行くだけでも行ってみるかな」

街で盗賊の噂がされていたが話を聞くと孫策さんの居る所だけあって、この辺りは治安が良いみたいだった。

「そっぴや斧の名前だっけ、どうしようかなー…」

その後、結構な時間悩んでいたが結局何も思いつかなかったので諦めて寝ることにした。

旅先での出会い（後書き）

「雪蓮！！政務をほったらかしてどこに行っていたんだ？」

「めっ、冥琳。今日は違うのよ！街の警備をね」

「その話は兵士から聞いている。だがそれは雪蓮の仕事では無いし、だいたいあの後はどこで何をしていたんだ」

「えーっと…、あっ！そうそう、面白い子に会ったのよ」

「今はそんな話をしていないのだが」

「まあまあ聞いてよ、それでね」

「雪蓮！！」

「はいっ！あー、そっ、そう！後でちゃんとやるつもりだったのよ？」

「そうか、ならいいんだが…しかし！終わるまでは酒を飲むのは禁止とさせてもらっ」

「そっ、そんな事したら死んでしまっわ！！」

「それは大変だな。仕方が無いから私が監視をしておかなければな」

「それじゃあ逃げられないじゃない（ボソッ）」

「ん？何か言ったか」

「何でもないです」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7898y/>

真・恋姫無双～男の様な女の様な白いヤツ～

2011年12月14日00時47分発行